

「読む」とは人生の宝庫

会計研究科 神宮司 歩

私が、最初に手にした本は、イソップ物語の『都会のねずみと田舎のねずみ』だ。

字を覚えたいという強い欲求に目覚めた4つのとき、祖母に一生懸命「あいうえお」から教わり、夢中で字を覚えた。毎日下手くそな字を書きながら、50音字が目に見えて自分のものになっていき、「わかる」というプロセスが何よりも面白くて仕方なかった。

字を覚えると、途端に今度は読んでみたいという強い欲求に駆られ、初めて自分の口で脳と一体化して「読む」という行為にひたすら感動したことを、今でも覚えている。一生懸命、一字一句、つたない音読ではあるが自分の力で丁寧に読み切った本は後にも先にもこれだけである。初めて読んだ本というのは、強烈に印象が残るもので、大人になった今でもとても愛着のある一冊となっている。

読書というのは、幼少時に触れるほど強く記憶に刻まれ、感受性豊かに育つ手助けをしてくれるものだと実感する。私たちに字を覚え、読み、知るという大きな感動をもたらし、言葉から繰り出されるストーリーを想像することで、無知からの成長の道を示してくれるものとなる。自身の形成課程において、もっとも身近に存在し、お手本となるのは「本」であるといっても過言ではないだろう。

歳を重ねるにつれ、知識ある読書が増えるため、幼少時の大感激までとはいかないが、時間を置き、環境にともない何度も読み返すことで、今度は何とも味わい深い感動を与えてくれるものへと変化していくのも読書の醍醐味である。また、本から得られる人生のヒント、ひらめきや新たな発見に遭遇することで、より豊かな心を養う機会に出逢うこととなる。活字離れが騒かれる今、「読む」ことの大切さ、図書館はまさにその宝庫でもあるということを改めて認識してもらいたい。